

アメリカン・ボードの初期の教派関係

溝 口 靖 夫

は し が き

アメリカ最初の外国伝道団体であり、且つ神戸女学院や同志社の設立と密接な関係をもっているアメリカン・ボードの性格について考えたい。問題はアメリカン・ボードの教派性又は超教派性の理解に存するのである。アメリカン・ボードはコングリゲーションナル（会衆派又は日本での場合は組合派）の外国伝道団体として誰からも理解されている一方、又、超教派的（interdenominational）であることも多くの人々によって知られているが、それら教派性と超教派性との関係は一体どうなっていたのかについては、案外知られていない。しかも、このことが、日本のプロテスタント伝道史における教派関係と教派間の協力関係とも関連性があるので、アメリカン・ボードの本問題の研究は、日本プロテスタント史研究の背景をなす意味をもつものである。日本におけるキリスト教の展開過程の背景として三つのものが考えられる。第一は固有の日本社会の伝統であり、第二はアジア大陸殊に中国におけるキリスト教の受容並びに中国を通してのキリスト教の間接的影響であり、第三は日本へのキリスト教の伝達者としての立場にあった欧米におけるキリスト教界の性格である。本研究はこの第三の分野に属する意味付けをもつものである。

更に、アメリカにおけるこの様な代表的な外国伝道団体の成立と発展の経過に関しては、伝統的な宗教思想の要因はもとより、アメリカの対外的政治的な生長や、ヨーロッパの近代思想の反映や、アメリカ内部の経済的な社会的な諸要因が存するのであり、この様な特定の宗教団体の教派関係の推移過程を明かにすることにより、ひいては、宗教

現象の社会学的理解のための資料をも提供することが、本研究の意図するところである。

一、アメリカン・ボード成立までの諸要素

一七八三年のアメリカ合衆国の政治的独立達成を契機として、アメリカ人の国民的意気が揚り、国民的使命感が促された。同様の精神的昂揚の時機は一八六五年の南北戦争後の国内統一の達成されたとき到来したのであって、ともに、アメリカ・キリスト教界におけるミッシヨン事業の興隆と関係をもつものである。

十八世紀の末葉は、世界的に見ても、自由主義的思潮の抬頭した時期である。アメリカの独立運動は、元来ヨーロッパ大陸の民主主義思想に源流をもつが、アメリカの独立はヨーロッパに反応して、一七八九年のフランス革命となり、フランス革命が更に全世界に自由主義的気運を巻き起したのである。又独立戦争中アメリカはフランスに接近したため、フランス流の啓蒙主義の影響を受けることとなり、神学的にも啓蒙主義時代を招来した。即ち従来の三一神的信仰に対してこれに批判的であるところのユニテリアニズムが風靡する傾向を示した。この様な未曾有の思想的変動期において、保守的な信仰又は神学を持する人々は、信仰の一大覚醒運動（リバイバル）を推進することとなった。たとえば、一七九〇年にはマサチューセッツにメソジスト派の信仰が伝入し、カルヴィン主義を信奉していなかったクリスチャン達の中に新たな信仰の火を燃やしたのである。又、エール大学のティモテー・デュワイト総長は、フランス流の啓蒙的新神学に反対し、信仰復興に貢献した。アメリカ教会のミッシヨン事業への気運もまたこの様なリバイバル運動と関連をもつものであった。しかもこれに対して刺激となったのは、イギリス人の海外伝道への開拓事業であった。

イギリス人による海外伝道事業はケアリによって始められた。ウィリアム・ケアリ(William Carey, 1761-1834)はインドに伝道していたが、彼はイギリス・バプテスト外国伝道協会に属した近代インド伝道の先駆者である。彼の

故国への手紙が刺戟となって、一七九五年一月八日ロンドン・ミッシヨナリー・ソサイエティが生れた。そしてこの会の組織としては、「すべての教派の福音主義的な牧師と平信徒より成る⁽¹⁾」と同年一月十五日の第二回集会の決議録に記されているように、この伝道会は最初から超教派的なものであった。すなわち会衆派 (Congregational)、長老派 (Presbyterian)、監督派 (Episcopalian) 等の会員が共同でこの会を形成したのである。しかしその主力となったものは会衆派のものであった。この伝道団体によりいかに大いなる世界伝道が行われたかは云うまでもない。殊にイギリスの太平洋諸島の伝道はこの団体の活動に負うものである。イギリスでは、それより少しおくれて一七九九年四月十二日、「チャーチ・ミッシヨナリー・ソサイエティ」が国教会員達の手によって形成された⁽²⁾。後者もまた近代イギリス人による世界伝道への貢献の最も代表的なものであったが、これらのもの、特に前者が刺戟となって、アメリカに一八一〇年アメリカン・ボードという外国伝道会が生れたのである。この団体はいわばロンドン外国伝道協会のアメリカ版とも云うべきものであって、その成立のときから超教派的であったが、その主力は会衆派のものであった。そこで、いまこの団体が生れるまでの経過をもう少し詳しく顧みたい。

アメリカン・ボードは特定の教会や教派が主体となってきたものではなく、何人かの同志が一体となってきたのである。すなわち、かのヘイスタック・ミーティングと呼ばれている祈りの会に列席した若い数名の学生達がつつになつてできたのであり、この点、個人単位の成立の根拠をもつものというべきである。しかし彼らがその計画を具体化するために提案した相手はそれより前に存在した牧師会―ゼネラル・アソシエーション―の年会であつて、単なる個人ではない。しかしその会も亦、特定の教派の教職者全体の会ではなく、その教派(コングリゲーションナル)に属する牧師達有志の会であつた。その会によってつくられたアメリカン・ボードに、発足後間もなくその構成要素として他の教派からの協力を吸合して運営されたのであって、そこにこの会の超教派性が存するである。

十八世紀末から十九世紀初にかけて、世紀の転換はいろいろな意味で欧米の人心に新たなエポックを自覺せしめ

た。アメリカのキリスト教界においても、異教社会に対する福音宣伝の使命感が盛り上ってきた。これに刺激を与えたのは前述のイギリスのロンドン外国伝道協会(LMS)やチャーチ・ミッシヨナリー・ソサイエティ(CMS)等の活動及びニュースであって、十八世紀末に数個のミッシヨン団体が生れたのである。その中、後にアメリカン・ボードと關係が生ずるものとしては、一七九六年十一月ニューヨーク・ミッシヨナリー・ソサイエティ(一七九六―一八一六年)が成立した。これには長老派、改革派、バプテスト派の諸教会が共同参加している。その伝道の対象は国内のインディアンであった。その翌年の一七九七年、同じくオランダ改革派教会の人々は二月十四日にニューヨークのアルバニーに会してノーサン・ミッシヨナリー・ソサイエティを組織した。これにも同じく改革派、長老派、バプテスト派の諸教会の牧師や会員が参加している。この伝道会も中部及西部ニューヨーク州のインディアンに宣教師を派遣している。これら二つの伝道団体により、いくつかの機関紙が出されたが、それらは国内の伝道ニュースだけでなく、海外の伝道事情、殊にロンドン・ミッシヨナリー・ソサイエティの太平洋伝道であるとか、アフリカやインドの人々への伝道の計画などを掲載したので、これもアメリカン・ボードの成立を促した。

会衆派ではどうであったか。十八世紀末頃には明かに二つの傾向が形成されていた。福音的(evangelical)なものとは自由神学的(liberal)なものとはであった。後者は前述の様に主としてユニテリアニズムに傾いていたが、前者はそれに対して信仰復興(リバイバル)の立場に立ち、又ミッシヨン団体を支持するものであった。マサチューセツ州の「福音的」な立場の牧師達はその力を結集する目的でゼネラル・アソシエーションの形成を計画した。かくて一八〇三年六月二十九日この団体が生れたが、これから七年後にはこの団体がアメリカン・ボードの母体となるに至ったのである。

ゼネラル・アソシエーション・オブ・マサチューセツはこの州での二十四地区の中の五区を代表する程度の少数派に属するものであった。その信仰基準としてはウェストミンスター小教理問答の信仰内容が採用された。こうして

この団体はマサチューセッツの保守的な立場の牧師の連盟として生れたものであるが、同時に又、彼らの牧する教会の連盟としての意味をもつものであった。これに対して、マサチューセッツの自由神学的な多数の牧師達はこの連盟が信仰の自由の妨げとなり、又自由・保守両派の間に壁を設けるものとして反対したのである。自由神学の人々は一八〇四年「マンスリー・アンソロジー」(Monthly Anthology)をいう月刊誌を出版し、保守派のものは一八〇五年「パノプリスト」(The Panoplist)を出した。後者は一八〇二年に同じく保守派の手で創刊された「マサチューセッツ・ミッシェナリー・マガジン」と一八〇八年合同し、それ以後は“The Panoplist, and Missionary Magazine United”と云う名称で続刊されている。この機関紙はカルヴィン主義的信仰の正統性護持とミッシェン精神高揚につとめ、一八一〇年アメリカン・ボード結成後は同ボードのニュースなどをしばしば報道している。

アメリカン・ボード形成のもう一つの要素となったものは、マサチューセッツ州ウィリアムズタランのウィリアムズ・カレッジと同州アンドーヴァのアンドーヴァ神学校とである。アメリカン・ボードの最初の主唱者としてのミルズらが学んだのはこのカレッジと神学校とであった。即ち、先ずかのヘイスタック・ミーティングが行われたのはウィリアムズ・カレッジである。この町は初めウェスト・フーザック (West Hoosac) と呼ばれていたが、ウィリアムズ (Colonel Ephraim Williams) というピエリタンの家系出身のものの名をとってウィリアムズタウンと名付けられた。そのウィリアムズ・カレッジは初めアカデミーとして一七九〇年に設立されたが、一七九三年カレッジに昇格したのであり、会衆派の牧師フィッチ (Dr. Ebenezer Fitch) というこのアカデミーの校長であった人が初代の学長になった。その次の学長はムーア (Dr. Z. S. Moore) で一八一五年から一八二一年まで在職し、その年アーモスト大学の初代の学長になった。その次がグリフィン (Dr. Edward D. Griffin) といふ、一八二一年から一八三六年まで学長をつとめたが、この人は元アンドーヴァ神学校の正統派神学の代表的人物であり、一八一一年から一八一五年までボストンのパークストリート教会の牧師でもあった人であり、アメリカン・ボード成立後は役員として活

躍している。更にその次がアメリカ教育史でも有名なホプキンズ (Dr. Mark Hopkins, 1802-1887) であって、この人はアメリカン・ボードの初代の会長として三十年間奉仕した人であり、身をもってウィリアムズ・カレッジとアメリカン・ボードを結んだものと云うことができる。⁽⁶⁾

ところで、アンドーヴァ神学校のことを述べる前に、ここで、アメリカン・ボードの礎石をすえたかのヘイスタック・ミーティングのことを簡単に見たい。

ヘイスタック・ミーティングとは、文字通り干草積場の会の意味である。この祈りの会が元となって、アメリカン・ボードが生れたのであるが、この祈禱会が生れたのは、当時ウィリアムズ・カレッジの隣接の農場においてであり、そこは後年このカレッジの校庭の一部となった。一八〇六年八月の或る日の午後、五人の学生がスローン (Sloan) という人の農場の森蔭で祈りの時をもっていた。そのとき突然雷雨となったので、森を離れて付近の干草積場の側に行き、横降りの雨を凌いだのである。五人の名はミルズ (Samuel J. Mills)・リチャーズ (James Richards)・ロビンズ (Francis L. Robbins)・ルーミス (Harvey Loomis)・グリーン (Byran Green) 等であったが、襲雨が通り過ぎる間、彼らはともに語り、ともに祈った。その話題はアジアであった。彼らは東インド会社の事業を或る程度知っていたので、この会社の貿易の対象となる人々に就いて、特にその道徳的な宗教的な需めについて、又、これらの暗きに坐する民に対する光の福音伝達の使命について語り合い、身をもってこの任に当たたいと祈ったのである。ただし、ルーミスだけは、アジアの伝道が時期尚早で、生命の危険を伴うべきことを考え、伝道の前に先ず文明をもたらすことが必要でないかと主張した。しかしミルズ他三人のものは、神の助けを求めて祈った。最後にミルズが "Come, let us make it a subject of prayer under the haystack, while the dark clouds are going and the clear sky is coming," と祈ったとき、一同祈りを終えて讚美歌を歌った。そのとき、黒雲が去って、空が晴れてきた。まことに象徴的な経験であった。⁽⁷⁾

これより二年後の一八〇八年九月七日、ウィリアムズ・カレッジ内に「兄弟会」(A Society of Brethren)と名付ける団体が形成され、これがアメリカン・ボードの前身となった。ただしこの団体はまだ極く内輪のもので、ほとんど同志だけがその存在を知っているというような有様であった。その理由は、彼ら自身、外国伝道という事業が容易ならぬものであることを知っていたからであり、ただ秘かに祈りながら、その目指すところが実現する日を待ったのである。その会の規約も記録もすべて秘密にするため暗号で書かれているが、その仲間の一人であったエズラ・フィスク (Ezra Fisk) により後日 (一八一八年十月八日) 原文から解説されたものによれば、会の規約は次のとおりであった。⁽⁸⁾

兄弟会の規約

第一条 本会の名は「兄弟」(Brethren)と称する。

第二条 本会の目的は会員の手によって、異教徒に対するミッションが始められるに至ることである。

第三条 本会の運営は、年ごとに選任されるところの会長・副会長及書記に委ねられ、彼らは本会の通常の責務を遂行するものとする。

第四条 本会の存在は秘密にする。

第五条 新たに会員を認める場合には、最も慎重にこれをなすものとする。志願者については、その性格や一身上の事情が伝道を実行するにふさわしいものであるか否かについて詳しく調査をすること。入会を許可するに当っては、異教徒への伝道に出かけるのに妨げとなるようないかなる種類の業務にも携っていないものであることが確められねばならない。何人も普通に福音的と呼ばれるはっきりした教義に対するしっかりした信仰を表明するのふさわしい入会を許可されない。何人も個人的に親密になり、少くとも二人以上の会員によって入会許可にふさわしい人物であることを信頼され、且つまた次のことを誓約し、署名するま

では、本会の規約を見ることができない。すなわち「本会の存在に関する神聖なる秘密を守ることが厳かに誓う。」

第六条 会員はすべて、折りによる熟慮と兄弟達との協議の結果、本会の目的と相容れないと思われるあらゆる事業から全く自由な立場に立って、召命があり次第、いつでも異教徒伝道に出かけることができるように準備をなしておくこと。

第七条 誰も申し出さえすれば、本会から脱退し得る。また本会はその者の性格、事業又は状況が除名に値するところが明かにされるときは、会員の誰であるを問わず除名する権限をもつ。

第八条 この規約は本会の三分二以上の会員の同意を得るのなければならない、変えることができない。

サムエル・J・ミルズ 一八〇八年

エズラ・フィスク 一八〇八年

ジェームズ・リチャーズ 一八〇八年

ルーサー・ライス 一八〇八年

これによっても知れるように、この団体は元来秘密裡に数人の個人によって結成されたものであり、公式に特定の教派又は教会によってつくられたものではなかった。そしてこれがアメリカン・ボードの礎石となったのである。

ウィリアムズ・カレッジについて、アメリカン・ボードの成立の根拠となったのは、アンドーヴァ神学校である。ウィリアムズ・カレッジからサムエル・J・ミルズらが入学し、ここがアメリカン・ボードの結成の地となったからである。

アンドーヴァ神学校は一八〇八年設立されたが、この神学校も十九世紀初頭におけるマサチューセッツの神学的な進歩派と保守派の二つの対立を反映している。というのは、十八世紀末から進歩派が優勢となり、その学問上の中心

としてはハーヴァード大学が指導的な役割を演じたが、十九世紀となり、ハーヴァード大学の自由神学的傾向はますます強くなってきた。これに対して、会衆派の保守的神学の立場のものが、伝統的神学の立場から伝道者養成のための神学校を必要とし、設立されたのがアンドーヴァ神学校である。すなわち一八〇八年夏の神学校が開設され、カルヴィン主義を支持することとなった。⁽⁹⁾

ミルズは一八〇九年九月ウィリアムズ・カレッジを卒業後、しばらくエール大学の大学院に籍を置き神学を研究した。ここで彼はハワイの青年オブーキア (Obookiah) と出会い、これがハワイ伝道の契機となったのである。⁽¹⁰⁾

一八一〇年春ウィリアムズ・カレッジの同志であったミルズとゴールドン・ホールとジェームズ・リチャーズとがアンドーヴァ神学校に入学した。ここで彼らは新たに他の同志を見出し、ひたすら外国伝道への熱を燃していた。彼らは一日も早く外国伝道へ乗り出すため、ロンドン・ミッシェナリー・ソサイエティ (L. M. S.) から派遣されるという方法がよいはないかと考えた。そこでゴスポートのボーグ博士 (Dr. Bogue) に手紙を出して、若し L・M・S が彼らが必要とするならば、彼らは喜んでそのもとめに応じようと述べた。しかし、仲間の中でミルズはこれに不賛成であり、彼の考えではこれはアメリカ人自身の義務であると思われ、これをアンドーヴァ神学校の教授達に相談した。しかるに教授達の意見も彼ら自身外国伝道団をつくることを良しとするものであった。⁽¹¹⁾

遂に時が至り、一八一〇年六月二十五日、アンドーヴァにおいて、この問題について協議し祈る会が開かれた。この会合において、丁度そのとき開かれようとしていたマサチューセツ・ゼネラル・アソシエーションの年會にこれを提案することになった。

六月二十七日、この会合が開催され、二十八日、スプリング博士、アドニラム・ジャッドソン、サムエル・ノット、サムエル・J・ミルズ、サムエル・ニューウェル等がこの会に紹介され、彼らはミッシェン設立を提案した。その結果、この会により設けられたのがアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign

二、成立後の諸教派との関係

アメリカン・ボードは設立の翌一八一二年には、宣教師を海外に派遣するため、先ずロンドン・ミッシェナリー・ソサイエティに援助を求めたいと考え、ジャドソン (Adoniram Judson) を正月元旦頃パケット (Packet) 号でイギリスに派遣した。しかるにこの船はフランスの私掠船に捕われ、彼も一時捕われの身となったが、間もなく釈放され、五月 L・M・S・の記念日直面にロンドンに到着し、種々打合せをした。その交渉の内容は、ボードの宣教師が L・M・S・と何らかの方法で提携して伝道を行えないか、即ち若しできれば全面的且つ決定的に L・M・S・の指図に従ってではなく、一時的に L・M・S・から支持を得ることはできないか、またいかなる場合にも、両団体の共同の経費で運営される道はないか、若しそれができる場合には、その伝道は誰の指示の下に置かるべきものか等であった。しかるにロンドン側ではアメリカン・ボードの申出を断つたのである。すなわち大西洋を隔てての二つの団体が一緒に事を運ぶ場合、計画に統一を与え、活動を敏速に進めることは困難であるとの理由であった。L・M・S・の書記ジョージ・バーダーからの返事によれば、アメリカ諸教会がただにボードの四名の会員だけでなく、むしろ四名の会員を彼ら自身の力で異教社会に派遣し得るようになることを希望する。しかし若し必要とあれば、彼らの中の或るものを、L・M・S・の宣教師として受容れ、彼ら自身独立することができるようになるまで、宣教師としての彼らの契約に抵触しない何らかの方法で援助することは可能であると述べたのである。⁽¹³⁾

こうして、アメリカン・ボードはその成立以前から L・M・S・との協力を得たいと一度ならず考えたのであるが、結局自給外国伝道の方針が双方により尊重されることに定まったのであって、アメリカン・ボードは今やイギリス人との協力よりもアメリカ内部の諸教会における協力態勢を確立する方向に努力することになったのである。

一八一二年、アメリカン・ボードはプレスビテリアン（長老派）教会の總會に彼ら自身と同じような外国伝道団体をつくってはどうか、そしてまだ福音を知らない諸国民に伝道する大いなる目的を促進するための二つの団体の協力ができる様にしてはどうかと勧誘したのであった。これに対して、プレスビテリアンの總會では、「外国伝道の仕事は恐らく単一のボードの下で經營されるのが最善であろう」との理由で、アメリカン・ボード以外もう一つ同じ様なものをつくる必要はないと決めたのである。この様な方針により、長老派では別箇の宣教団体はつくりませんが、アメリカン・ボードを積極的に支持することとなり、ここにボードの超教派活動の道が開かれた。この意味では、ボードは殆んど最初から超教派的であつたと云うことができるのである。

かくして、一八一二年の九月のアメリカン・ボードの次の会合では一三人の新メンバーが七つの州から選ばれたが、その中、八名（内四名はニューヨーク、二名はニュージャージー、二名はペンシルベニアからのもの）は長老派の会員であつた。これ以後、アメリカン・ボードにおける会衆派の人々と長老派の人々との協力は密接なものとなつた。諸教派の中でも、両者の間が最も親近の關係にあつたのは、マサチューセッツの歴史的事情によるものであり、十七世紀のニューイングランドのピューリタン植民史に於ける両者の親善關係がこの基盤となるのである。即ち一六二〇年の会衆派のプリマス植民と一六三〇年以來のマサチューセッツ灣植民との提携という伝統の上に立っている。しかのみならず、既に述べたように、十八世紀末葉以來のマサチューセッツにおける会衆派教会及び牧師間の自由・保守両神學論争の過程において、アメリカン・ボードの母体となつたマサチューセッツ・アソシエーションという牧師会が、保守派に屬するものであり、彼らはカルヴァイン主義を信奉したので、その限りに於いて、この会の傾向は、会衆派の中でも、カルヴィニズムの本拠とも云うべき長老派と最も近い關係にあつたと云うことができる。但し、長老派の中でもまた進歩派（ニュー・スクール）と保守派（オールド・スクール）が生じ、ニュー・スクールはアメリカン・ボードと一八六九年まで提携し、オールド・スクールは一八三七年分離して長老派の外国伝道会をつく

ったのである。それについては後述することとし、その前にアメリカン・ボードと密接な関係にあった他のものの一つの教派—オランダ系改革派との関係について見たいと思う。

今見ようとしているアメリカのオランダ改革教会というのは The Reformed Dutch Church in America 又は The Reformed Protestant Dutch Church in America と称され、或うは簡単に The Dutch Reformed Church と呼ばれていたもので、一八六七年以後は Dutch の一字を省いて The Reformed Church in America と呼称されるに至ったものである。

この教会は一六二八年オランダの母国の教会に連るものとして成立したのであるが、一七八三年のアメリカ合衆国の政治的独立達成（パリ条約）の数年後、一七九二年に実質上独立し、一七九四年完全独立となったものである。それとともに彼らは積極的に異教徒伝道に乗り出し、一七九六年十一月ニューヨーク・ミッシヨナリー・ソサイエティの成立となったことは前述の如くである。それには、長老派・改革派・バプテスト派の諸教会が共同参加していた。又、その翌年オランダ改革派教会の人々はノーサン・ミッシヨナリー・ソサイエティを組織したが、これにも改革派・長老派・バプテスト派の人々が参加している。これらの伝道団は主として国内のインディアンに伝道していたのであって、その中に、一八一〇年にアメリカン・ボードが生れ、はじめて海外伝道が着手されることとなったのである。

この様な海外伝道に対する気運において、一八一六年になると、今述べたニューヨーク・ミッシヨナリー・ソサイエティとノーサン・ミッシヨナリー・ソサイエティとウエスタン・ミッシヨナリー・ソサイエティの三団体がつくられた。これには、長老派、オランダ改革派、ユナイテッド・ミッシヨナリー・ソサイエティというのがつくられた。これには、長老派、オランダ改革派の他、アソシエテッド・リフォーームド・チャーチズ等が加ったのであり、この団体も主としてアメリカ・インディアンへの伝道をしていたが、数年の中に、段々財政的に困難となり、また伝道上の積極的な理由から、アメリカン

・ボードに合併が提案されたのである。しかるに、そこには多くの牧師達からの反対もあったが、一八二六年に至つて、この案はオランダ改革派教会の大会で可決され、合併が実現し、アメリカのオランダ改革派の人々にとっては何れも海外伝道活動がなされることになったのである。この合併により、アメリカン・ボードはユナイテッド・ミッシヨナリ・ソサイエティの約一万一千ドルの負債を一八二六年のボードの年会前に支払い、さらにその後二年間に五千ドル乃至六千ドルを支払うことになった。ただし、この合併により、ボードはソサイエティから不動産その他の財産を譲り受けたのであり、その金額は負債総額よりも大きかったと見られている。¹⁵

こうしてアメリカン・ボードは一段と有力な宣教団体として発展し、従来の海外ミッシヨンであるインドのマラティ、セイロン、トルコ、パレスチナ、マルタ、シリア等の他、一八二六年以後には一八三〇年にギリシャと、同年広東にミッシヨンが新たに開かれた。すなわち、アメリカン・ボードの目標としてその頃中国と更に東インド諸島が加えられたのである。

他面、合併後のボードの在り方について、月日の経過とともに再検討がなされるようになり、合同後数年にして、一八三二年、オランダ改革派教会側からアメリカン・ボードの従来の一体関係を改めて、協力関係にしたいという提案がなされるに至った。これによると、オランダ改革派教会の会員で外国伝道を志願するもののあるときは、従来通りアメリカン・ボードの宣教師として任命され、また他の教派に属するメンバーと同じく、ボードの指令に従うのであるが、しかも彼らはオランダ改革派教会の会員として同教会の教規と規律に従うべきこと、及び異教徒の間に教会をつくるときは同改革教会に属するものとしてこれを形成すべきこと、またオランダ改革教会内からのアメリカン・ボードへの外国伝道のための献金はボード内の改革派の宣教師のために用いることなどであった。この提案における経済問題は従前オランダ改革教会内で少なからざる人々により感じられていたところであり、同教会員関係で集めた献金が会衆教会関係に用いられるなどということは賛同し難いというのであった。結局この協力関係へ切り替えるという

提案に対して相互間に諒解が成立し、この新たな関係がこの後二十五年間続いた。この間の共同活動の中心は東インド、特にボルネオであった。ここがオランダの植民活動の下にあったところから、オランダ改革教会員の活動の地として最適のものとなれたからである。アメリカン・ボードのボルネオ・ミッシン（一八三八〜一八五二）の形成及び活動はその具体化であった。しかるに、協力時代の二十五年を経て、オランダ改革教会はいよいよ独力で東亜伝道を担当する時機となり、遂に一八五七年、アメリカン・ボードから独立してミッシンを形成した。日本へプロテスタント伝道が開始されたのが一八五九年であるから、その二年前のことである。即ち、アメリカのオランダ改革教会とアメリカン・ボードとの関係を時代的に要約すれば、第一期が一八二六年から一八三二年までの両者合体時代、第二期が一八三三年から一八五七年までの協力時代となっている。⁽¹⁶⁾

次に長老派の人々との関係はその後どう展開したであろうか。既述の如く、一八一〇年会衆派の人々によりアメリカン・ボードが成立して間もなく、一八一二年長老派に協力が提案され、それ以来両者の提携がなされていた。その後、オランダ改革派との協力関係で見たように、一八二六年に長老派、オランダ改革派、及びバプテスト派等により形成されていたユナイテッド・ミッシンナリー・ソサイエティとアメリカン・ボードとが合併したことにより、それ以来アメリカン・ボードの主要な教派的構成要素は、会衆派・長老派、及びオランダ改革派の三者となったのである。即ち、一八三一年アメリカン・ボードに所属の六二の団体会員の中、三一が長老派、二四が会衆派、六がオランダ改革派、そして一がアソシエイト・リフォームド派であって、それに所属の七〇人の按手札を受けた宣教師の中、三九人が長老派、二九人が会衆派、そして二名がオランダ改革派となっていた。⁽¹⁷⁾

しかるに、オランダ改革派のミッシン活動の展開過程で見たように、アメリカン・ボードとユナイテッド・ミッシンナリー・ソサイエティとの合同後、月日の経過とともに、ボードの在り方について種々の検討がなされてきた。その傾向はオランダ改革派だけでなく、長老派にも現われるに至った。

ここで当時の長老派の神学的事情を瞥見したい。会衆派の内部におけると同じく、長老派の内部にも神学的に進歩派と保守派が現われ、両者の対立は年ごとに顕著となり、一八三七年の長老教会の総会で、ニュー・スクールと呼ばれた人々とオールド・スクールと呼ばれた人々の二派に分れた。これより先き、長老教会はアメリカ独立戦争後、その地歩を固め、一七八八年教憲を制定し、更に伝道事業において他教派との協力を必要とし、会衆派との提携が要請された。かくして、一八〇一年、ニューイングランドの会衆教会との間に「合同のプラン」(Plan of Union)の協定が結ばれた。これによれば、長老派の牧師は会衆派の教会で奉仕し、又反対に、会衆派の牧師は長老派の教会で、それぞれの教派に席を置いたままで奉仕することができるという案である。又、両派の信徒を共に混じた教会をつくることもできるというのである。前述のアメリカン・ボード成立後、長老派に協力を呼びかけたのも、それが一八一二年のことで、両教派間にこの様な最も親密な関係が維持されていたときであったことが有力な契機となった。しかるに、一八二六年のアメリカン・ボードとユナイテッド・ミッシヨナリー・ソサイエティとの合同後、五年目の一八三一年、長老教会として外国伝道を最も効果的に推進する方法はいかなるものかについて研究の動議が出された。しかしその時は、長老教会内に独自の外国伝道会をつくるまでに至らなかったが、一八三七年の総会において、従来の会衆派との「合同のプラン」に反対し、且つ又、アメリカン・ボードとの結合関係に対する批判が現われた。これを称えたグループはオールド・スクールと呼ばれたが、彼らはこのときアメリカン・ボードから分れて、独自の海外伝道会(The Presbyterian Board of Foreign Missions)をニューヨークにつくった。

しかし、このとき、長老教会の中で従来進歩派と考えられ、ニュー・スクールと呼ばれた人々はこれに反対し、依然としてアメリカン・ボードに留まったのである。彼らは神学的にもカルヴィニズムを緩和してニューイングランド神学又はエドワード流の神学(Edwardian Theology)を称えて来たグループであり、一八三七年の総会を契機に長老教会はこれら新旧二派が分れたのである。

長老教会内のニュー・スクールとオールド・スクールの二つのグループは、その後一八六九年まで継続したが、この年両者が合同し、その機会に従来アメリカン・ボード内に留ったニュー・スクールのグループもボードから分れて長老派の外国伝道会と合同したのである。これ以前アメリカン・ボードはオランダ改革派から分離し、今また長老派とも分れ、遂に超教派的性格を殆んど喪失するに至った。アメリカン・ボードが我が国に明治二年（一八六九年）以来明治初年に宣教師を送ったときは、まさにこの分裂以後の状態であったことは注目すべきことである。

結 び

いまアメリカン・ボードの初期の教派性と超教派性を考えるに当り、これと関連があるのは、わが国のプロテスタント伝道における教派関係である。

横浜、神戸及び大阪において最初超教派的な公会設立の考えが圧倒的であったのは、アメリカにおける過去の諸教派協力の要請とその精神に基づくところが少くないであろう。又反対に、それにも拘らず教派関係を払拭することができなかったのは、アメリカ教会における事情を反映するところがあると考えられる。ことに、アメリカン・ボードの日本伝道の開始の時、たまたまアメリカではダッチ・リフォームド及び長老教会がこれから分離した後であったことが影響するところ多大であったと思う。

更に社会学的に興味あることは、アメリカン・ボードの歴史的地盤としてのマサチューセッツ・アソシエーション並びにボード自身と長老派の内部におけるニュー・スクール及びオールド・スクールとの関係についてである。図式的にこれを見て、長老派が神学的に右翼であり、会衆派が左翼とすれば、右翼の中の左派が左翼の中の右派と提携する可能性があるのは社会学的に自然の傾向である。しかも、その提携、或いは結合性の度合は、右翼又は左翼の二団体内におけるそれぞれの左右両派間の結合反撥の度合と反比例するものであることが明かである。たとえば、長老派

の内部でニュー・スクールとオールド・スクールの対立が激しいときは、ニュー・スクールは長老派よりも一層左翼的存在としての会衆派に近付き、その対立が解消するに至れば、左翼的集団を遠ざかるという宗教現象を通しての社会集団関係又は人間関係の一端がうかがわれるのである。

- (1) Richard Lovett, *The History of the London Missionary Society*, London, 1899, Vol. I, p. 15.
- (2) Eugene Stock, *The History of the Church Missionary Society*, London, 1899, Vol. I, pp. 68-71.
- (3) Albert E. Dunning, *Congregationalism in America*, N.Y., 1894, pp. 284, 508.
- (4) Westminster Shorter Catechism イギリス国教会改革のため主として長老派、会衆派等の清教徒によりつくられ、一六四八年国会に上程採用された子供達に学ばせるための信仰の要点を教えたもの。
- (5) Dunning, op. cit., pp. 284-285.
- (6) Ibid., pp. 365-366.
- (7) "The Haystack Prayer Meeting" in *Congregational Work*, Feb. 1906; "The Haystack Prayer Meeting," *The Haystack Centennial Celebration at Williamstown and North Adams, Mass.*, Oct., 1906, p. 17.
- (8) H. W. Pierson, *American Missionary Memorial*, N.Y., 1853, pp. 18-19.
- (9) Dunning, op. cit., pp. 285-291.
- (10) 溝口靖夫『宗教社会学研究』関書院、昭和二十八年。
- (11) *The Haystack Prayer Meeting*, Mass., 1906, p. 25.
- (12) Joseph Tracy, *History of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, N.Y., 1842, pp. 26-27;
- (13) Ibid., p. 29; *The Panoplist*, and *Missionary Magazine United*, Boston, 1812, pp. 178-187.

- (14) Newcomb, *Encyclopedia of Missions*, p. 109.
- (15) Edward Tanjore Corwin, *A Manual of The Reformed Church in America*, N.Y., Ch. XIX.
- (16) Corwin, *Ibid.*, pp. 237-245; 溝口靖夫「アメリカン・ボードのホルネオ伝道」『神戸女学院大学論集』八巻二号三六頁(尚、同論稿における註(2)の内、アメリカ・オランダ改革教会関係のミッシェン活動の発展の時代別は、次の如く改める。第一期は一七九六年のニューヨーク・ミッシェナリー・ソサイエティの設立から一八二六年まで、主としてインディアン伝道の時代、第二期は一八二六年から一八三三年まででアメリカン・ボードとの合併時代、第三期は一八三三年から一八五七年まででアメリカン・ボードとの協力時代、第四期は一八五七年以後の独立して伝道した時代)
- (17) Newcomb: *Encyclopedia of Missions*, p. 109.
- (18) The Presbyterian Church throughout the World, N.Y., 1874, p. 615;
The American Church History Series, Vol. XI.

The American Board and its Early Relationship to the Denominations

Résumé

The American Board is said to be both interdenominational and Congregational at the same time. How can we correctly understand the nature of the Board? To make an historical study of its formation and the process of its development is the theme of this paper.

As an historical fact, the Board was neither started by the churches nor by a denomination in a strict sense, but by Congregational volunteers. Soon after its formation in 1810, the American Board became interdenominational through the cooperation of Presbyterian, Dutch Reformed, and the other groups, but after a period of time all the denominations except the Congregational separated from the unity of the American Board.

The history of the Protestant churches in Japan was influenced by this interdenominational beginning, as well as by the denominational nature of the missionary movement in America. The Protestant churches in the earliest days in Japan were interdenominational in a sense, but soon they became denominational until 1941 when most of them united to form the United Church of Christ in Japan.